新築住宅部門

最優秀賞

Office of Takumi Iwasawa/AUFTAKT
岩澤 拓海
関本哲也建築設計事務所
関本 哲也

【作品名】
新雑賀町の長屋/サニーグレイス

設計	Office of Takumi Iwasawa/AUFTAKT・関本哲也建築設計事務所
施工	株式会社 豊洋
竣工日	2020年3月15日

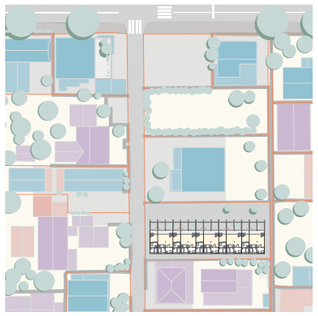
建物概要

建設地	島根県松江市	延床面積	298.12㎡
敷地面積	396.26㎡	構造・規模	木造2階建(10戸)

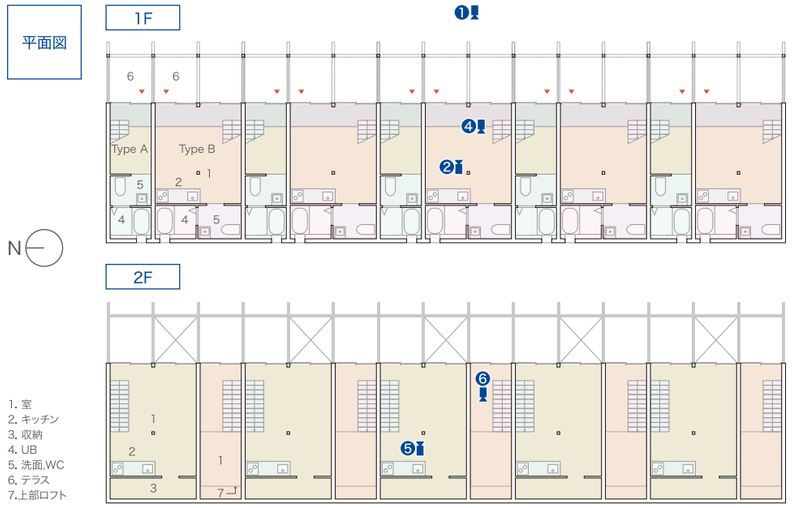
設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	ガス給湯器
冷暖房機器	エアコン

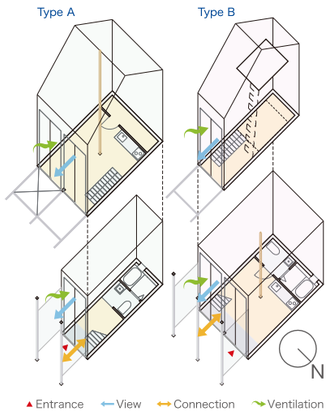
配置図



平面図



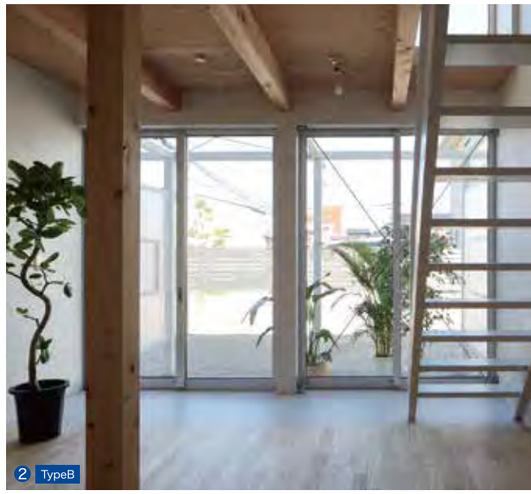
ダイアグラム



断面図

植物や屋外用家具で人を招き入れる設えをしたり、オーニングや屋外用カーテンで仕切ることができたり、住まい手が生活の場を拡げられるとともに、内部と外部・周辺への開き方やつながり方を自由に調整することも可能である。

❶90㎜角の柱、梁、ポリカーボネートの袖壁で縁取られるテラス。内外の架構が連続する。



❷TypeBの1階から東側屋外を見る。長屋の境界壁とテラスの袖壁が連続。

❸周辺より低く細長い切妻のボリュームを西側に寄せ配置することで、前面道路を引き込んだゆとりのある外部空間を東側に生みだしている。
❹TypeBの1階。右手がキッチン、左手が2階に上がる階段。正面扉は洗面・バスルームにつながる。柱・梁をあらわしにすることで開放性を生み出している。
❺TypeAの2階から東側屋外を見る。2階天井高は約3.5mとし、空間の気積を最大化し開放的な生活を楽しめるようにしている。
❻TypeBでは上部に一部ロフトを設けることで、収納等のスペースとしている。TypeA、Bの各住戸で一部嵌合する部分があるため、床下地を二重張りとし住戸間の遮音に配慮している。

設計コンセプト

松江駅からほど近い、古くからの町割りが残る地域に建つ木造2階建10戸の長屋形式の賃貸住宅。木造賃貸長屋の新しいあり方をめざした。
周辺は静かな住宅地である一方、狭隘な前面道路にかかる法令上の制限から共同住宅の建設が不可能な土地が多く、戸建て住宅・賃貸アパートによる建替えや、敷地分割された土地、歯抜け状になった土地も散見される。
敷地は、間口が狭く奥行きが長いため、西側に玄関、東側に開口・ベランダを並べる商品化された賃貸住宅では、画一的な生活と周辺との断絶・閉鎖性を生む恐れがあった。
本件は、各住戸が外部空間に開くテラスを持ち、1階が一間、2階が二間分の間口を持つものと、上下階の間口が反転した2タイプの住戸からなる。内部は、1階、2階と高さと広さの異なる空間が連なり、内外の多様な居場所を使い分けることで、住まいと働く場所とを兼ねた使い方や、アトリエや小さなお店をあわせた住まい方も受け止められるのではと考えた。
多くの人が一度は住まうであろう規模の住宅だからこそ、多様な住まい手の生活を受け止め、明るく開かれた場所を介して、町と住まいと住まい手を縫い合わす試みがこの場所での答えの一つとなり、ひいては新たな住まいのあり方を提示できるのではないかと考えた。

審査委員講評

二つのタイプから構成される各住戸の間取りと、軽快な構造によって豊かな住空間を実現しています。コロナ禍においてこの住まいに付属されているセミパブリックなテラスは居室との一体的なスペースとして有効に働くと共に、各住戸の個性が溢れ出る事により、従来の木造賃貸長屋とは一線を画す環境を作り出すことが楽しみな意欲的作品です。

リフォーム住宅部門

最優秀賞

raumus
竹田 真志

【作品名】
土田の民家

写真撮影／山内 紀人

設計	raumus
施工	ヤマトハウス
竣工日	2021年3月20日

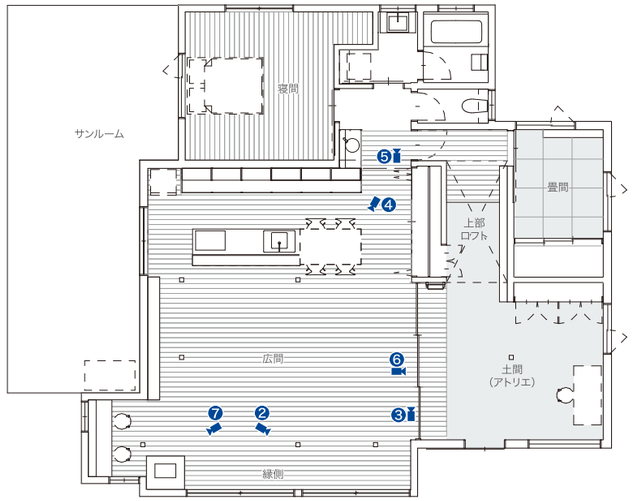
建物概要

建設地	岡山県岡山市	延床面積	125.00㎡
敷地面積	912.00㎡	構造・規模	木造平屋建

設備面の特記

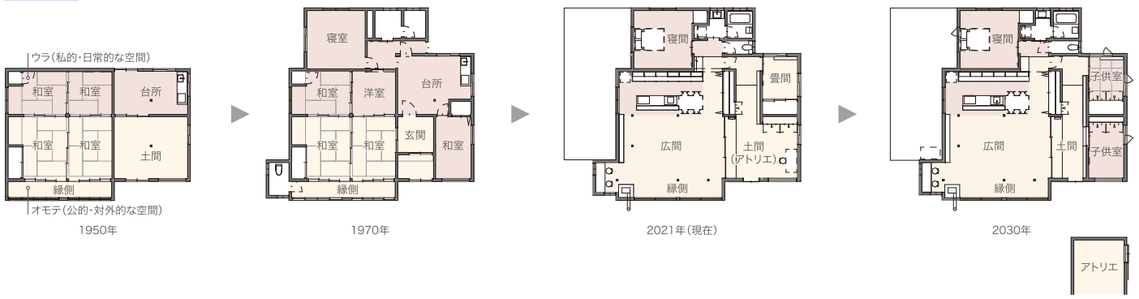
厨房機器	ガスコンロ
給湯機器	給湯暖房用
冷暖房機器	エアコン・床暖房（ヒートポンプ式）

平面図



建物竣工時に全てを完成させるのではなく、住みながら考え、その時々で適切な暮らしができることを第一に考えた。子供達が小さいうちは子供部屋は作らず、必要に応じて将来、既存の構造材を利用して簡易に部屋を間仕切れるような構成とした。夫のアトリエを敷地内に併用し、土間部分を子供部屋としても使えるように想定しており、将来のライフスタイルの変化に対応できる形としている。

間取りの変遷ダイアグラム



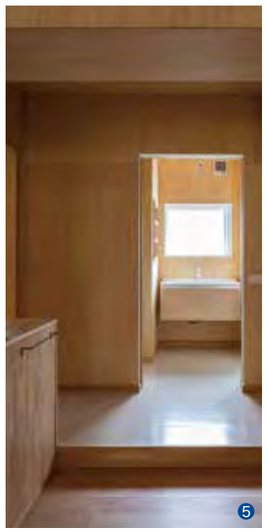
設計コンセプト

陶芸家と料理家の夫婦、幼い子どもたちの4人家族のための岡山市内の住宅。クライアントは新しい生活の拠点とする岡山で、茅葺き屋根の古民家を購入し改修して住むことにした。敷地周辺には同じく茅葺き屋根の上に金属板を葺き、現代まで住まれている古民家が数軒点在している。元々は農家の住まいとして作られたこの住宅は、数度の増築や改修によって少し窮屈な印象の空間になっていた。そこで地域の古民家の持つおおらかな雰囲気を取り戻し、民家の在り方を継承した上で、現代的なライフスタイルに合うように大きく間取りを変更することで、古い、新しいという枠組みを超えて、現代における民家の形をこの家族を支える生活の器として蘇らせたいと考えた。
夫婦は仕事上の来客が多く、日々の生活と仕事が連続して暮らしていた。陶芸家である夫は、日中はアトリエで制作を行い、作品を直接見にくる来客の対応がある。妻は人を集め、大勢にご飯を振る舞う機会も多い。そこで制作や来客のスペースである土間・畳間、日中の生活スペースである広間、就寝する寝間の3つのスペースとして再構成した。土間と広間部分は3枚引戸で仕切られているが、その建具を開け放つと50畳ほどの一室空間となる。屋根形状に沿った寄棟形の天井は頂部で4m程あり、非常に大きな空間である。住宅としての機能を超えた、仕事場のようでもあり、地域の集まりの場にもなるような自由で新しい未来の住まいのかたちを考えた。

審査委員講評

70年の時が経過した古民家の改修です。平面図だけ見れば土間アトリエの特徴を除いて特別な空間性を感じない計画にも思われますが、一度写真に目をやればその密度と豊かさに驚嘆させられます。大らかさと緻密さ、古さと新しさ、単純さと多様性、など相反する価値が絶妙なバランスで共存しています。家族の営みを感じさせてくれる家です。

❶❷❸❹❺古民家の改修に際し、新旧の部位を対比させたり、同化させる方法を避けた。既存の柱や丸太の梁など時を重ねてきたモノの存在感に対し、木やモルタル、スチールなど様々な種類の素材を付加することで、どこまでが新しくどこまでが古いのか解らないような状態を目指した。



❻玄関と一体的に使える土間は、住宅の玄関というよりはアトリエやお店のような雰囲気の空間である。大きな上り框はベンチとしても利用が可能で、周辺の方や友人が気軽に立ち寄れるスペースとなっている。
❼古民家の雰囲気に合う設備を使いながらも快適な温熱環境となるように計画した。

新築住宅部門

優秀賞

石川晋次建築設計事務所
石川 晋次

【作品名】
法成寺の家

設　　計	石川晋次建築設計事務所
施　　工	石川晋次建築設計事務所
竣 工 日	2020年9月15日

建物概要

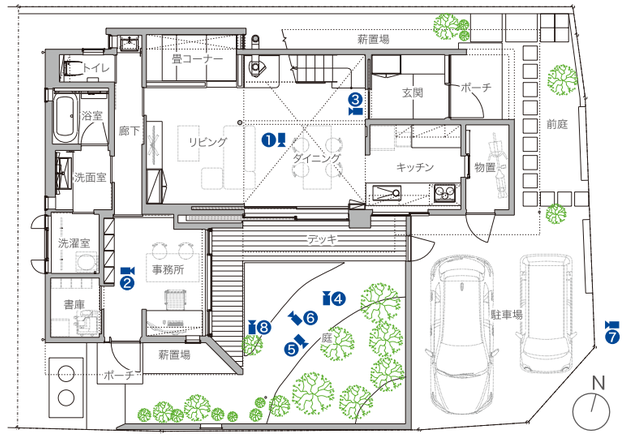
建 設 地	広島県福山市	延 床 面 積	127.90㎡
敷 地 面 積	193.51㎡	構造・規模	木造2階建

設備面の特記

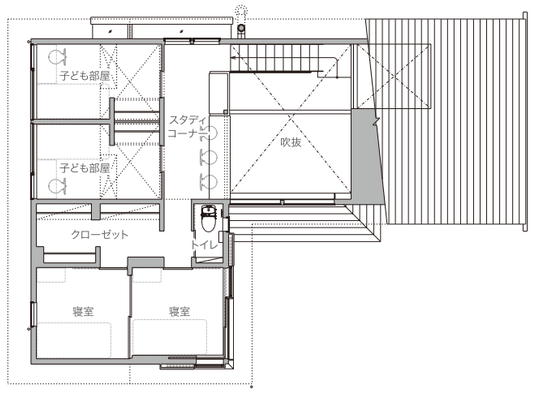
厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン・薪ストーブ

平面図

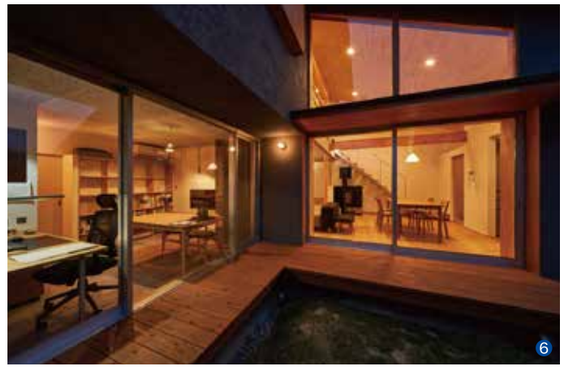
1F



2F



❶ダイニングと庭。サッシと障子を引き込んで、床とフラットなデッキで庭とつながる。
❷庭を通してダイニングキッチンの様子が伝わる事務所。
❸リビング・ダイニングは、プライバシーを保ちながら、大きな開口と吹き抜けによって明るく開放的な空間としている。
❹❺焚火やどんぐり拾いなどを通じて、庭で自然とのふれあいを楽しむ子どもたち



❻庭からの夜景。団らんの場と仕事の場のつながりを感じながら、ほどよい距離感を保っている。
❼庭を囲む塀と樹木によってプライバシーが保たれるため、窓辺にカーテンが不要で住まいの温かな雰囲気が外部にも伝わる。
❽プライバシーを確保した庭を中心に配置。庭には、焚火ができるよう川に見立てた石敷きの路地を通し、箱庭のように小さな丘と山を配し、自然の景観を立体的に作り出している。

設計コンセプト

福山市北部郊外の敷地に建つ、4人家族の住居と設計事務所を併せ持った設計者自身の住宅。駐車場と庭を囲うように建物をL字型に配置し、L字のそれぞれの先端に住居と事務所の入口を設けている。小中学校の通学路で地域の生活道でもあるやや交通量の多い前面道路に対して、プライバシーを確保するため、建物と回転対称状のL字型に塀を設けて庭を囲い込み、住居と事務所の双方から全開口で庭とつながる配置にした。また、切妻の大きな屋根を形成しながら、道路に対して軒を低く構えて、屋根面を視線下にし、軒下に植栽や枕木の柵（腰掛）、鎖樋を配して、道行く人に穏やかな印象を与える。
庭は、暮らしの場と仕事の場をほどよい距離感でつなぐ空間的余白や、住まいに自然の潤いをもたらす感覚的要素としてだけではなく、実際にその場を使って活動することを企図している。焚火をしてキャンプをしたり、デッキにテーブルを移動して外で食事をとったり、ハンモックを掛けて昼寝をしたり、樹木や花や果実、そこに集まる虫や鳥とのふれあいを子どもに与える装置として計画した。
この庭にLDK、事務所、吹き抜け越しに階段と2階スタディコーナー、寝室を接して、室内と庭の意識的距離、量的ボリュームを近づけ、相互が均等に作用するひとまとまりの領域をつくろうとした。
建物も庭も、その使い方で有様は変わる。動植物や子ども達が体現してくれる情景に、暮らしの豊かさを感じている。

審査委員講評

L字型に配置された建物と打ち放しコンクリート塀に囲まれた立体的な庭を家の中心に据える。設計の意図は見事に日常の暮らしに快適な喜びをもたらしているようです。どんぐり拾い、焚火ごはんに興じる子どもたち。そして、それを眺めながらの充実したホームワーク。そのまま何かのコマーシャルの一場面に使えそうなアフターコロナへの一つの答えです。

リフォーム住宅部門

優秀賞

株式会社 小松隼人建築設計事務所
小松 隼人

【作品名】
己斐の家

設　　計	株式会社 小松隼人建築設計事務所
施　　工	株式会社 CozyCozy
竣 工 日	2021年9月29日

建物概要

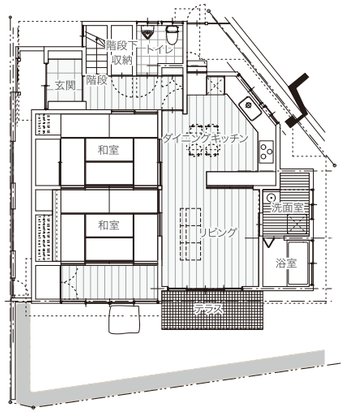
建 設 地	広島県広島市	延 床 面 積	137.89㎡
敷 地 面 積	200.23㎡	構造・規模	木造2階建

設備面の特記

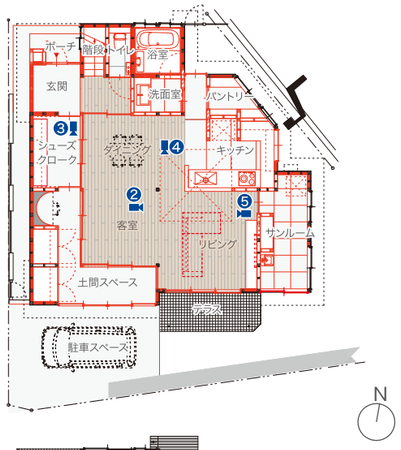
厨 房 機 器	ガスコンロ
給 湯 機 器	ガス給湯機
冷暖房機器	エアコン・床暖房（ヒートポンプ式）

平面図

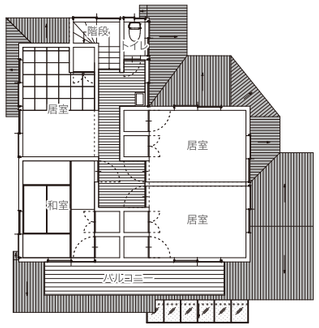
1F リフォーム前



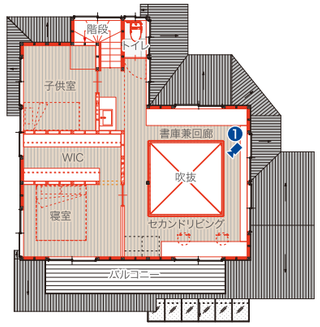
1F リフォーム後



2F リフォーム前



2F リフォーム後



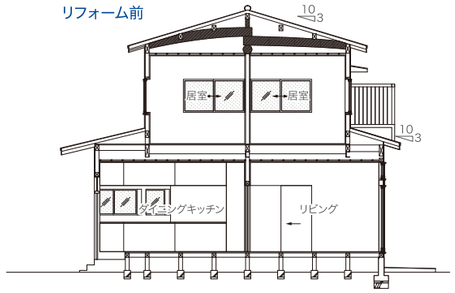
設計コンセプト

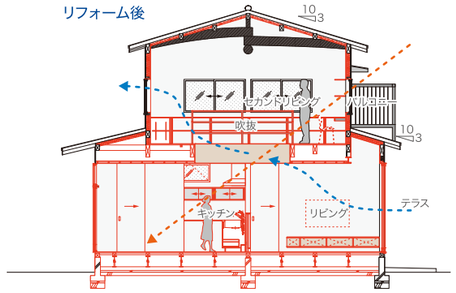
広島市の市街地に建つ住宅の改修計画である。敷地周辺は道路幅の狭さなどを理由に空き家が目立ち始めているが、緑豊かな環境は市内であることを忘れさせる。この地で生まれ育った建主は、築50年程の住宅を譲り受け、改修しながら住み継ぐことを決断された。
要望を整理していくと、最小限の操作で住環境が良くなる方法を選ぶ必要がある。
まず既存建物から現状の風の滞りを読み取ると、ひとつの場所に風穴を開けることで、熱環境の流れがつくれるとわかった。既存2階の東南方向の2室をどちらかではなく、互いをまたいで床を大きく開口したことが主な操作となるが、その開口を熱環境の重心とすることで、光の流れ、風の流れを上下階に紡いだ。開口の位置と寸法は2階の窓が開閉できるように回廊をつくること、採光が1階の北側居室まで届くことを考慮して決定している。開口の周りにできた余白は書庫も兼用した回廊と家族のセカンドリビングとなり、1階のリビングと垂直の繋がりもつくりだせた。
再建築に多くの課題がある市街地は、その理由で未来から取り残されていく。しかし、ライフスタイルが多様化した現在であれば、車が必要ない暮らし方や、仕事場や店舗として活用するなど、様々な既存建築物のストック活用が考えられる。若い世代の積極的なストック活用がこの市街地の空洞化をなくす一助となることを期待したい。

審査委員講評

外観は昭和の時代に建てられた住宅の面影を残しながらも内部では大胆なリノベーションを行い、時代を超えながら現代の住まいにチューニングした設計者の技量を感じさせる住宅です。オリジナルの持っている骨格の良さを活かし、熱環境を上手く読み解きながら豊かな住まいの空間を実現しています。長い時間佇んできた風景を残しながら未来へ住み継がれる好例だと感じました。

断面図





❶2階のセカンドリビングはそれぞれの方位に窓が配置され、採光も風通しもよく窓から見える景色が長閑である。最小限の所作で住環境が良くなる改修を選び、住宅の熱環境を循環させた。
❷2階東南方向の2室を互いにまたいで床を大きく開口し、光の流れと風の流れを上下階に紡いだ。

❸1階には南北を貫通する土間スペースを設けて風の通り道をつくり、冬季は南からの採光を受け止めて蓄熱させる。断熱は既存の断熱材をすべて現行の基準に合わせ、さらに土間と居室の境界に内窓を設けることで断熱性を高めている。
❹キッチンからはリビングを通じて庭をのぞみ、家事をしながら吹き抜けの2階の様子も感じられる。
❺リビングからダイニング方向を見る。住まいの一体感を感じながら、明るく開放的な作りとしている。

新築住宅部門

佳作

建築設計事務所 可児公一植美雪

可児 公一・植 美雪

【作品名】
ZOGA-H

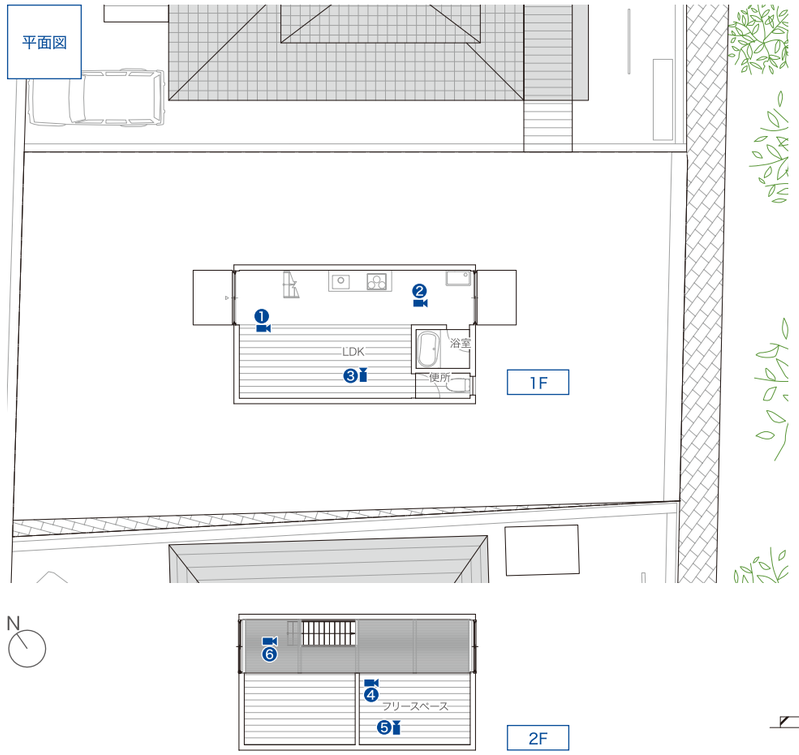
設計	建築設計事務所 可児公一植美雪
施工	株式会社 中工務店
竣工日	2020年9月30日

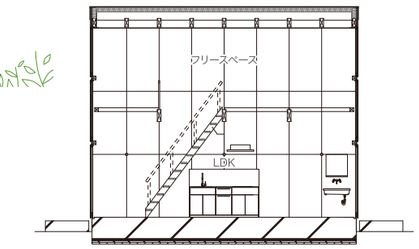
建物概要

建設地	広島県東広島市	延床面積	59.62㎡
敷地面積	233.99㎡	構造・規模	木造2階建

設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン





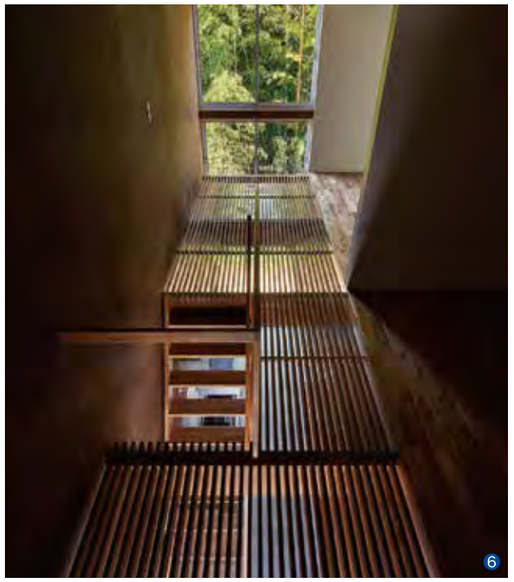
設計コンセプト

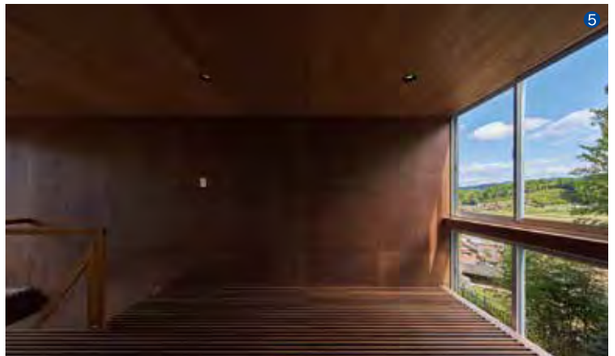
プロジェクトのきっかけは「この限られた予算で新築の住宅を建てることは可能か？」という相談だった。工事にかけられる予算は約1,500万円で色々なところに相談したがうまくいかず、私たちのところでダメなら新築は諦めるとの事だった。予算が限られている事が必ずしも建築の強度に影響するとは限らない。贅肉を落とし、体を動かす事に最も適した過不足ない筋肉を持ったアスリートのように、本当に必要なものだけを残したプリミティブで力強い建築を目指した。
1階平面の約半分は基礎打ち土間仕上げとし、その上部の2階床を光の落ちるルーバー床とした。土間とルーバー床の接する短手壁に、トイレの換気窓を除くこの家全てのサッシ6枚を集中して設けた。階を跨いで設けられたサッシは、それ自体が手摺となり余分なディテールとコストを排除した。また、この住宅では「集める」ということについて考えた。窓を集め、明るさを集め、開放感を集め、抜けを集めた。1つ1つは凡庸で力無いが、それらの小さな力の集積が大きな力となり、凡庸ではない特別な空間が生まれるのではないかと考えた。ローコストを諦めず、潔さを学び、普通を疑い、本当に必要なものだけを残す。竹林からの風が吹き抜ける清爽とした家となった。

審査委員講評

「最小限住宅」よりも少しだけ床面積は大きいけれどミニマムさではこちらが上でしょう。建築のエレメントとそこから生まれる空間を集中、対比させることでシンプルさではなく強度を生み出しています。どんな家族がどんな生活をしても受け止めてくれる住宅だと思います。是非ご家族が住まわれている写真を見てみたいと思わせるそんな住宅です。

❶❷❸1階平面の約半分は基礎打ち土間仕上げとし、その上部の2階床を光の落ちるルーバー床とした。土間とルーバー床の接する短手壁に、トイレの換気窓を除くこの家全てのサッシ6枚を集中して設けた。階を跨いで設けられたサッシは、それ自体が手摺となり余分なディテールとコストを排除。また「集める」ことについて考え、窓を集め、明るさを集め、開放感を集め、抜けを集めている。





❹❺限られた予算内で、光と風を最大限に大きな塊として取り入れるため、既製品のアルミサッシを集中して使用。
❻土間には、竹林からの風が吹き抜ける。

リフォーム住宅部門

佳作

株式会社 y+M design office
三宅 正浩

【作品名】
エキノマエ

設計	株式会社 y+M design office
施工	有限会社 坂根住宅
竣工日	2019年12月1日

建物概要

建設地	島根県邑智郡	延床面積	167.00㎡
敷地面積	719.00㎡	構造・規模	木造平屋建

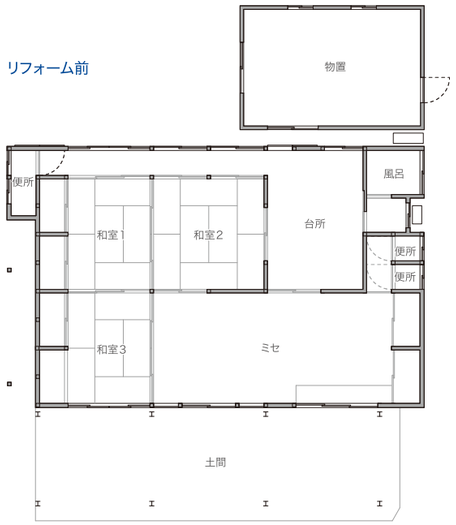
設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	石油ふろ給湯器
冷暖房機器	エアコン・薪ストーブ

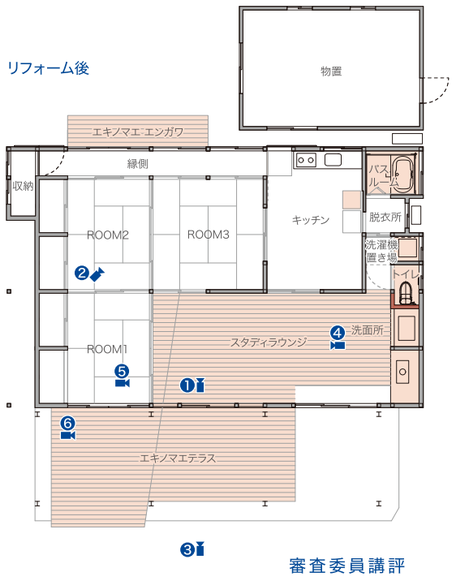
アクソノメトリック図

平面図

リフォーム前



リフォーム後



設計コンセプト

明治時代に建てられた古民家のリノベーションである。学校と自宅の往復でまちとの接点のない学生のために、また、気軽に集まる場所の少ない地域の方々のために、さらに、旅館やリゾートホテルしか選択肢のない観光客のために生活空間の一部を開放。「中高校生のスタディラウンジ」「地域の方々のイベントスペース」「ゲストハウス」として活用するため、地元の中高生や地域の方々の協力のもと数回のワークショップを通じて完成した。
ローコストながらも最低限の断熱・気密工事を施し、住環境性能を向上。テラス屋根をポリカーボネートとし、既存の地板を間引くことで、北側でありながら明るく快適な中間領域としている。そのため、昼間は照明に頼ることなく採光を確保できている。夏や中間期は南北の風を取り入れ、土壁の湿度調整によりできるだけエアコンに頼ることのない住環境としている。冬は薪ストーブによってラウンジ全体を暖めている。
ここをサードプレイスとして過ごした中高校生たちは、ほとんどが町外へ進学や就職することになるが、長期休暇には帰ってくることのできる場所となり、いずれは地元にUターンするきっかけにもなるかもしれない。
まちと一体感を感じながら生活するクライアントは、コロナ禍でも多くの方々と交流を持ちながら暮らしている。すっかり少なくなってしまったまちとの結節点として、エキノマエの存在が頼もしい。

審査委員講評

使用目的が明確だと設計プランにも迷いが生じない。そんな印象を持った作品です。明治時代の古民家を近隣の人たちとともにリノベーションしていくという物語がこの建物の価値をさらに高めています。地域に開かれたテラスを構成するのは鉄骨の梁、柱、ポリカーボネート製屋根、ウッドデッキ。異なる素材の組み合わせが新鮮。街のランドマークです。

❶❷幼少期から過ごした故郷にUターンしリノベーション。高校生のスタディラウンジと地域の方のイベントスペース、ゲストハウスを運営するクライアントの要望を叶えた。

❸ポリカーボネートのテラス屋根によって明るく開放的な空間となり、人を招き入れる。
❹地域の足であるバスターミナル駅の道路向かいに位置し、開放的なテラスとラウンジはまちと一体となって暮らすクライアントの生活スタイルを実現している。

❺夏は湿気対策として南北の通風や土壁による湿度調整を施し、冬は積雪の厳しい地域のため、薪ストーブによる暖房を採用し、空気の循環を行っている。
❻まちの一部となったエキノマエ。まちの内外を含め多くの方との交流の場となっている。

審査委員特別賞（新築）

鳥取県

有限会社 ふくた
福田 充宏

【作品名】
里山風景と暮らす家

設計	有限会社 ふくた
施工	有限会社 ふくた
竣工日	2021年4月27日

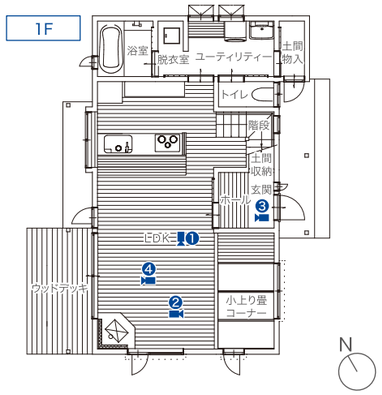
建物概要

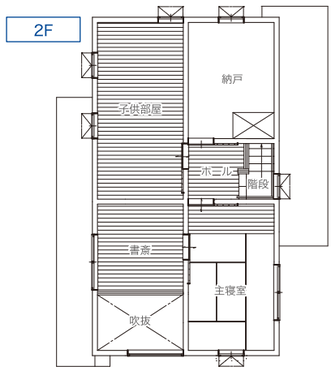
建設地	鳥取県鳥取市	延床面積	105.99㎡
敷地面積	851.00㎡	構造・規模	木造2階建

設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン・薪ストーブ

平面図





❶リビング西面の大きな開口部には深い庇をつけ、夏の日除けに。一方で、南面の開口部はLowe断熱タイプにし、庇をくぐり差し込む西日とともに、冬場の日射熱を有効に取り込む。

❷畳と障子を採用し、居室部分の壁は漆喰塗りにしたリビングの小あがり。程よくキッチンの目線から隠れるため、子どもたちの隠れ家になっている。
❸玄関ドアを開けると、外の風景が飛び込む。風通りの良い地形のため、夏場の通風を活かせるよう窓の設置箇所・種類を計画。
❹夏は涼しく、冬は暖かく快適。四季や日々の移ろいを感じられる。

設計コンセプト

「豊かな自然の中で暮らしたい」と3年ほど居住地を探されていた施主が出会った土地。
美しい周辺の里山風景を家の中まで取り込むよう配置・窓を計画。
また、新築の家が周辺の風景に溶け込むように外壁は杉板張り、内装は杉板と漆喰塗りを各所に使い極力自然素材で仕上げた。
薪ストーブの炉台やウッドデッキ、カーテン等は施主夫婦が作られた。ご自身達の愉しみと同時に、「いずれは子ども達と一緒に暮らしを作ることを愉しみたい」という思いがあるそう。子ども部屋の仕上げは未完成部分を残し、成長に合わせて一緒にお部屋づくりができるようにしている。
また、風の通りの良い立地を生かした通風計画や、「性能向上計画認定」を取得した高断熱施工など、施主の心身にも環境にも負担の少ないつくりをベースにしている。薪ストーブを採用し、将来的には災害時を想定した創エネの計画もされている。
作りこまれた完璧さよりも、経年変化や自らが手を加える愉しみの余白を残した大らかな家を。日本家屋のような、縁側から庭を臨みながら一日や季節の移ろいの豊かさに心を沿わせるような家を。そして、いつも自然を身近に感じる心地の良い家を目指した。
「自然に寄り添い、自ら暮らしを創る」。かつての日本に当たり前のようにあった暮らしは、これからの時代に求められ得る、前向きな暮らしの愉しみ方の一つであろう。

審査委員講評

豊かな自然の中に自然素材で仕上げた家を建てたい、というお施主さんの夢をかなえた結果です。周囲の風景に溶け込んだ外観はいたってシンプル、薪ストーブの煙突とウッドデッキはさながら西部劇？中に入れば余白だらけ。発展途上の我が家を家族みんなで仕上げていきましょう、という思いが伝わります。窓外の景色を眺める子どもたちは何思う？

審査委員特別賞（新築）

島根県

高橋翔太朗建築設計事務所
高橋 翔太朗

【作品名】
忌部の離れ

設計	高橋翔太朗建築設計事務所
施工	株式会社 たみつ建匠舎
竣工日	2021年9月4日

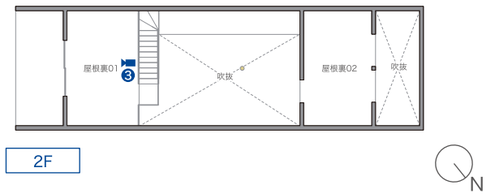
建物概要

建設地	島根県松江市	延床面積	61.63㎡
敷地面積	1,119.19㎡	構造・規模	木造平屋建

設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ
給湯機器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



❶真っ白な空間であるリビングとキッチンの間に、大黒柱として節木の荒々しさのあるヒノキの木を配置。この節木があることで、室内に居ても自然のチカラを感じることができる。
❷3人の子どもの成長記念として購入した絵などを飾りたいとの要望から、絵が映えるように白を基調とした空間とした。
❸天井高5.8mの吹き抜けには、トップライトを設けない計画とし屋根裏01の壁に大きな開口を確保。暖かい空気を外に放出する。

設計コンセプト

標高199mの高台にあり、360度自然に囲まれた贅沢な敷地からは、大山や宍道湖などを眺めることができる。普段から自然と近い距離で生活していることから、自然と一定の距離感を取るとともに、日常の視覚では感じることのできない景観を切り取り、新たな視点で自然を感じる建築を考えた。
もともと寄棟の納屋が建っていた場所へ建て替える計画であったため、建物形状も細長い敷地を活かし、土地との親和性のある寄棟を採用。積雪量も考慮し、急勾配の屋根とすることで、内部空間にスペースをつくる計画とした。平家のようなボリューム感で、屋根の下は全ての空間が連続し窓を通して外部へ誘導される。建物の中央には、節木の荒々しさのあるヒノキの大黒柱を配置し、内部にいても自然の力を感じることができる。
リビングや部屋01、屋根裏01などは、帰省した子どもたちが使えるスペースとし、キッチンや主寝室、ウォークインクローゼットなどのプライベートな空間を柱一本で緩やかに空間を分ける計画とした。南東側の屋根の寄棟妻側は開口部とし、空気の通り抜けや自然環境を切り取り、空や木々が迫ってくるような計画としている。
子どもの頃は忌部の母屋に暮らしていた妻が、忌部の地に戻り、贅沢な自然に囲まれたこの土地で、改めて帰ってよかったと思える離れであり続けたいと思う。

審査委員講評

大自然に囲まれながら茅葺きを思わせる屋根が印象的な母屋に付属する離れの計画。外観の姿そのままに内部では伸びやかな空間が広がり、高齢を迎えつつある家族間での多様な住まい方が今後可能な住宅です。小さいながらも立体的な設計により敷地全体を含め一体的で豊かな住空間と、懐かしくも新しい建築の佇まいを実現しています。

審査委員特別賞（新築）

岡山県

川井康弘設計室
川井 康弘

【作品名】
テンチコンゲンツクリノイエ

設計	川井康弘設計室
施工	株式会社 松建グループ
竣工日	2021年8月29日

建物概要

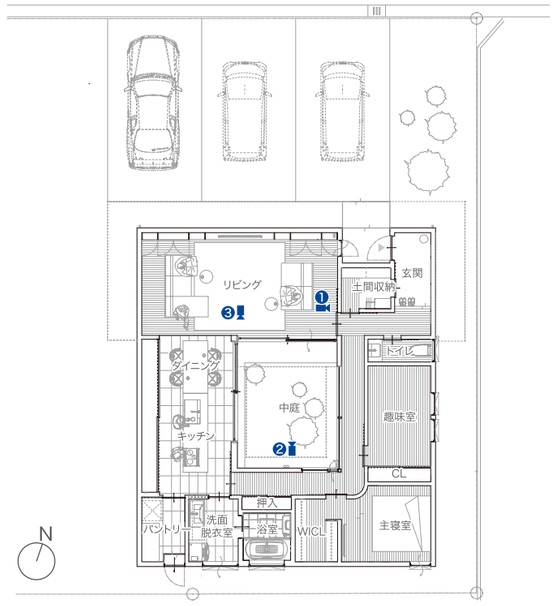
建設地	岡山県倉敷市	延床面積	95.11㎡
敷地面積	528.68㎡	構造・規模	木造平屋建

設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

❶リビングに入る夕日。右写真はかつての風景。

平面図



❷部屋のどこからでも空を感じることのできる回廊形式の平屋。
❸周囲の建物の窓の高さを調査し、どの位置からも中庭の開口が見えないように建物のボリュームを決定。軒高を低くし、圧迫感を少なくするとともにカーテンのない暮らしを実現。

設計コンセプト

計画地はもともと、高梁川河口の広い湿地・干潟であり、1848年児島味野村の野崎部左衛門により新田開発が行われ、田んぼが広がる広大な地域だった。今は住宅が立ち並び田んぼはほとんどみなくなったが、計画地の北側には大きな田んぼがあり、入母屋の農家住宅や蔵が建ち、かすかだが当時の雰囲気を感じる。
今回、平屋でかつカーテンのない暮らしがしたいという施主の要望を受け、田んぼの広がる原風景や農家住宅に敬意をはらい、茅葺き屋根の原型とも言え、周りに見通しの開口部のない天地根源造りをベースとした。天地根源造りは暖を取るため半地下になっているが、もともと湿地帯で水位も高いことを考慮して、GL※を地面から立ち上げ、その上に屋根を載せるフォルムとした。敷地の北側に広がる田んぼとの風景が茅葺き屋根を思わせ、歴史的ノスタルジーを感じさせる。外周に見通しの開口部を作らず、中央に穴をつくり高梁川の河原をイメージした中庭と、額で切り取った空を部屋のどこからでも感じる事のできる、回廊形式の平屋を作った。そして周囲の気配や視線を気にせず、かつ明るく暖かみのある日常の中の非日常の暮らしを作ることができた。

※ GL…グラウンドレベル（地盤面の高さ）

審査委員講評

中庭プラン（ロの字型）の家は往々にして他を寄せ付けない外観になることが多いのですが、この家は道路側のボリュームに切り妻屋根を載せることで見事にその雰囲気を一変させています。とかくプライバシー重視の要望が増える昨今、景観に配慮した設計に好感が持てます。内部空間の変化、強弱にもつながっていると思われます。

審査委員特別賞（新築）

広島県

くらし設計室
穂垣 友康・穂垣 貴子

【作品名】
坪生の家

設計	くらし設計室
施工	ホーム 株式会社
竣工日	2020年3月23日

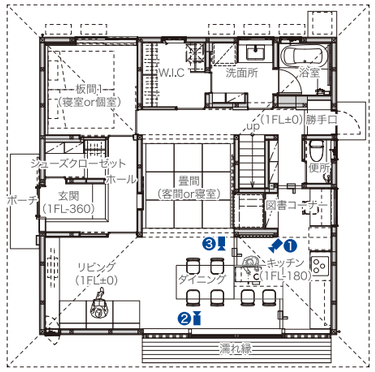
建物概要

建設地	広島県福山市	延床面積	101.07㎡
敷地面積	319.70㎡	構造・規模	木造2階建

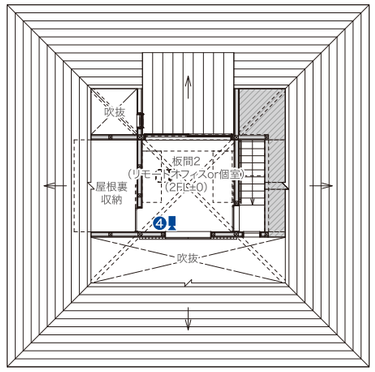
設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター・食洗機
給湯機器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



1F



2F

❶キッチン・ダイニングより南側の庭・アプローチを見る。キッチンとダイニングは床に段差をつけ、天板面が同じ高さとなるようにしている。
❷1階で暖められた空気はダイニング上部の吹き抜けを通して、2階の北側開口から外部へと抜ける計画である。
❸キッチン・ダイニングから南庭を見る。南側開口部は、外との繋がりをつくる造作の木製引分け窓を設置。
❹2階から見るダイニング・キッチン。南側の庭の緑を眺めながら料理を作り、家族で食事もできる。

設計コンセプト

敷地は広島県福山市東部の周囲に農地が広がり田畑とともに生活がある地域にある。敷地の東側には親世帯の住宅、西側には農機具用の納屋があり、かつて祖父母が暮らした本家の場所に、家族と戻り暮らすことを決めたご夫婦と子どもたちのための住宅である。
住宅は家族の成長や生活の変化に伴い必要な間取りが変わってくる。またコロナ禍による外出自粛やテレワークの普及により住宅は「住む」だけではなく「働く」を受け入れる寛容さが求められている。変わらない地域の自然環境と調和しながら、変化する現代の暮らしに寄り添う「職住一体」の住宅を目指した。
方形造りの大屋根の下に庭を眺めながら料理や食事ができるよう、南側にキッチン・ダイニング、明るさを抑えた西側にリビングのソファコーナー、中心に畳間（客間 or 寝室）、東側には図書コーナー、北側には板間1（寝室 or 個室）や水廻り・クローゼットを配置し、2階には北側の田畑の風景を望む板間2（リモートオフィス or 個室）を設けている。
それぞれの空間は完全に仕切るのではなく、回遊できる動線と室内開口により緩やかにつながっている。断面計画は方形屋根の形状をそのまま室内空間に現すことで空間のつながりを作り、温度差を利用した重力換気を行っている。暖められた空気はダイニング上部の吹き抜けを通して、2階板間2の北側開口から外部へと抜ける計画である。
敷地の南側には幼い頃に祖父母の家から眺めた庭の風景が変わらずにあった。新しい住まいでもこの風景を暮らしに取り込むことで、大切にしたい家の記憶をつなげたいと考えた。

審査委員講評

正方形プランに方形屋根を被せた可愛らしい住宅です。目を引くのが中心の四畳半の畳間。板の間でも中庭でもないこの空間がなんとも良い感じです。明確な機能を持たないからなのか、なんだかこの家の時間が少しだけゆっくりと流れているように感じさせてくれます。回遊性のある平面も決して大きくはないこの家を伸びやかなものにしています。

審査委員
特別賞
（新築）

山口県

atelier Kasho 一級建築士事務所
加生 祥啓

【作品名】
宇部の切妻

写真撮影／KYOKO OMORI

設　　計	atelier Kasho 一級建築士事務所
施　　工	山下建設株式会社
竣 工 日	2020年5月30日

建物概要

建 設 地	山口県宇部市	延 床 面 積	139.12㎡
敷 地 面 積	633.35㎡	構造・規模	木造平屋建

設備面の特記

厨 房 機 器	ガスコンロ
給 湯 機 器	エコジョーズ
冷暖房機器	エアコン・薪ストーブ

平面図

1.ポーチ　2.ガレージ　3.玄関ホール　4.下足収納　5.厨房　6.食品庫　7.ダイニング　8.リビング　9.将来個室　10.廊下　11.洗面所　12.トイレ　13.脱衣所　14.浴室　15.寝室　16.WIC　17.駐車場　18.バックヤード　19.北庭　20.南庭

❶ガレージから長手方向を見る。

❷リビングからガレージ方向を見る。

❸敷地俯瞰。切妻屋根の群れ。

❹ポーチの回転扉と開放された3連引戸。

設計コンセプト

敷地は周防灘を東に臨む段状宅地の中段に位置し、瀬戸内の温暖で安定した気候を享受する植生豊かな場所だった。
ここで多世代の家族が程良い距離感で群れて住むことをめざし、まず意識したのは広大な家族の庭を守る壁を作ることだった。とはいえ周辺に対し閉鎖的にしたくない。そこで格子回転扉を門扉として、ポーチを介して庭の空気が表に感じられる造りとした。

またご実家、ガレージ、離れ、和蘭小屋、すべての既存建物が切妻屋根であったため、本計画も敷地のアイデンティティとしての切妻屋根を採用することで、形態上も家族が群れて住むことを意識した。

平面計画では北側に水廻りを配置し、Ⅰ.ガレージ、Ⅱ.厨房・玄関ホール、Ⅲ.トイレ・浴室・寝室の3つの箱に1枚の屋根が架かる構成としている。それぞれの箱のあいだはポーチ、リビングで、風の抜けるポーチは休憩場所、雨の日の作業場所、植物の避難場所など、施主の多趣味を許容するフレキシブルな空間となる。また、リビングの外部建具を解放すると間口4mの開口となり、空気、視界の通り道となって広大な庭越しにご実家のリビングとつながる。

建築中にご夫婦に第一子が産まれ、リビングの一部は将来個室にもできるようにしたが、家族の敷地を一団と捉え、庭を介して各棟が離れとなって補完することで、将来の家族構成の変化にも対応した、3世代をつないで生活する家族の群れが創造できた。

審査委員講評

広々とした庭を介して親世帯が暮らす住居と適度な距離感を取りながら、切妻の風景を踏襲した外観が印象的。大屋根に覆われながらも、半外部的なポーチによって豊かな生活動線を生み出しています。庭と並行してリニアに展開する内部空間は軸組構造の仕上げと合わせて心地よいリズム感が特徴的な気持ちのよい住まいです。

学生部門

最優秀賞

東京理科大学
吉田 周和

【作品名】
「友恵湯」建替え計画
～銭湯と住宅の新しいあり方～

開口を開くこと・トップライト・砂利・残り湯を利用する小川によって開放感あふれる通り

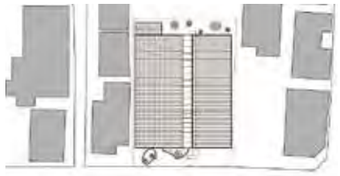
砂利や植栽によって緩やかに内と外がつながる室内露天風呂

中間領域に開くことで銭湯や通り庭を眺められる、住宅と休憩所の両立空間

銭湯の更衣室への入口と通り庭の抜けを強調する裏庭

1. 敷地と友恵湯・小さな銭湯の課題

山口県宇部市の「友恵湯」の建替え計画を想定。中低層の建物に囲まれ、周辺になじむ木造とRC造の混構造を採用した。2代目が引き継ぐ「友恵湯」は60年間地域のコミュニティの場として利用され、現在は市内で唯一の銭湯である。跡継ぎや経済面、老朽化など、多くの課題に直面し市内で唯一の銭湯をどのように守ることができるか。新しい住戸一体型銭湯のあり方を示し、これらの課題に応える一つの手段となることを期待する。



2. 住宅と銭湯の共存

窓を閉め切るとプライベートなワンルーム空間を作り、住宅として利用できる。

住宅は開口を中間領域に向けて開くことで銭湯の休憩所としても機能する。

障子を閉めることで部分的にプライベートな空間を生み出すことができる。開けている部分は休憩所となる。

ワンルームの住宅が銭湯と住宅の境界を不明確にする。領域の曖昧さは地域の人々とのつながりを強くし、手軽に居室空間を生むことができるため、豊かな住環境も成立させる。

3. 災害時の暮らしに寄り添う銭湯

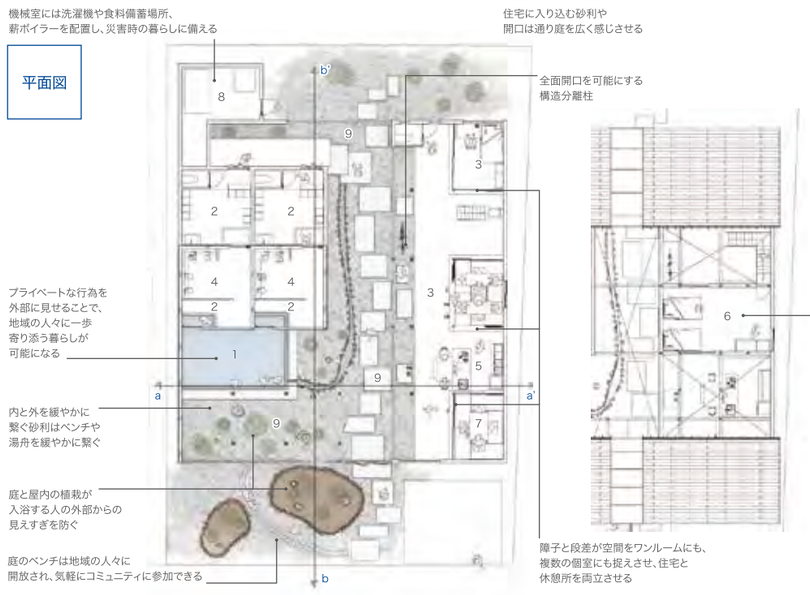
防災力の向上には地域力、人々の助け合いが欠かせない。銭湯は地域力を再生させるコミュニティ形成力を持っている。地域力を向上させることは未来の暮らしに寄り添うことになる。地域力向上の拠点となる住まいをめざす。

災害時には避難するだけでなく、生活に寄り添う必要がある。それが未来の暮らし、命を守ることにつながる。薪ボイラーで湯を沸かす銭湯は災害時にも湯を沸かすことができ、役所と協力することで、早急な湯水、食料の提供が可能になる。

4. 銭湯の温熱

住宅の空調や銭湯の換気は、環境問題、快適性に大きな影響を及ぼす。暖房は冷房の約6倍の二酸化炭素を排出する。季節によって換気する気流を変化させ、住宅の暖房を銭湯の熱によってまかない、露天風呂の快適性を年中維持する。
冬季には銭湯の熱を住宅に引き込み、加温・加湿を行う。シャワー室も浮き壁によって湯の熱を用いて暖める。夏季には開口を開けることで、自然風を感じながら湯舟に浸かることができる。

5. 室内露天風呂と住宅による地域力向上



1. bath
2. changing room
3. room
4. shower room
5. kitchen
6. bedroom
7. japanese tatami room
8. machine room
9. inner garden

住宅と銭湯が一体的に構成され、地域と結びついた新しいライフスタイルは住人と来訪者を結び、地域力を向上させる。銭湯はタオルや水着を着用する混浴である。衣類を着用する混浴は道に対して開くことを可能にする。外から見えることで安心して利用でき、また混浴によって男女関係なくコミュニティを広げられる。
最もプライベートな空間を最もパブリックに反転させることで、コミュニティは大幅に広がる。住人は地域の人々と休憩し、入浴する。これまでにないライフスタイルが確立される。

設計コンセプト

「未来に向け 暮らしに寄り添う」と聞いて、未来の暮らしとは具体的にどのようなものを想像するだろうか。私は少し先の日常という未来から後世の生活に至るまで、あらゆる人々の生活に寄り添う必要があると感じた。地球温暖化や南海トラフ地震、首都直下型地震のような災害など、様々な未来の暮らしを脅かす課題がある。
銭湯は衛生設備の発達に伴い、年々減少している。街の小さな銭湯の多くは家族経営だが、跡継ぎや収入の減少、老朽化など様々な問題を抱えている。銭湯と住宅のあり方を再考し、「環境負荷低減・防災・日常生活の豊かさ」を実現すると同時に、小さな銭湯の魅力を新しく見出すことはできないか、と考えた。
提案のポイントは大きく分けて3つある。まず、銭湯に欠かせない湯船は大屋根の下、中間領域に置くことで温熱環境に大きく寄与している。また、湯船の使い方、配置、インナーガーデンはこれまでにない魅力的な空間、銭湯を作り出す。2つ目は、住宅が土間と和室によるワンルーム空間で構成されていることだ。生活や銭湯の休憩に利用される空間での新しいライフスタイルは生活に豊かさをもたらす。最後に、災害についてだ。銭湯住宅による地域のコミュニティの活性化は防災力をも向上させる。災害時に、人々が助け合う絆を構築するとともに、人々に湯を供給することで人々に温もりを届ける。

審査委員講評

一粒で二度おいしい、いや三度おいしいとはこのことか。「お湯を沸かす」だけでみんなが笑顔になれる仕掛けが詰まった提案です。その提案をわかりやすく魅力的に見せる数々のイラストやキャッチコピーも秀逸。昨今、日本各地で銭湯好きの比較的若い世代による銭湯の再生計画が進んでいます。その点でもタイムリーなこの作品、実現してほしいなあ。

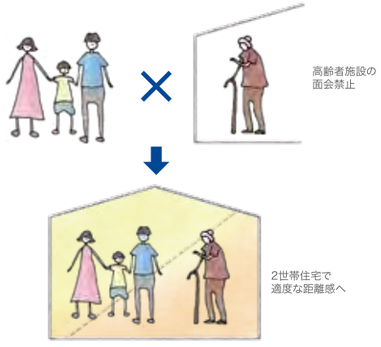
学生部門

優秀賞

北海学園大学
三浦 光雅・渡邉 憲成・髙﨑 菜々美

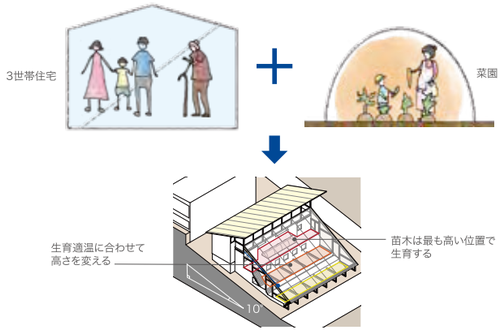
【作品名】
野菜を育て、暮らしを育む

1. 計画 -つかず離れずの2世帯住宅-

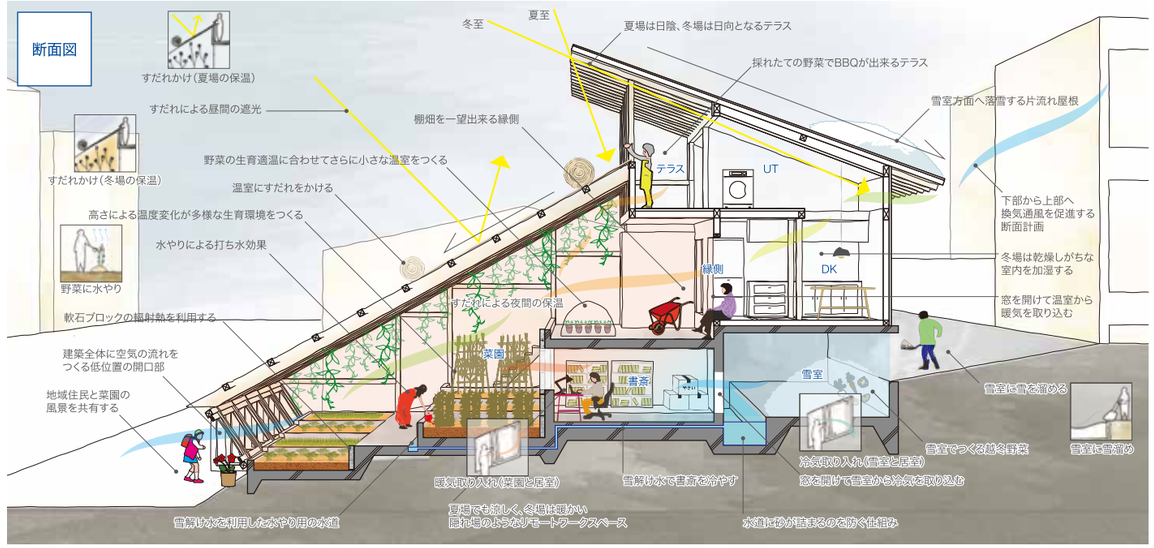


コロナ禍で高齢者施設の面会禁止など、家族と会う機会が失われている。一方で、リモートワークの普及により、働く場所が自由になりつつある。そこで、北海道札幌市郊外に親子が暮らすための2世帯住宅を計画する。コロナ禍の三密回避と同時に、多世帯住宅における世帯間の適度な距離感を設計する。

2. 提案 -環境装置としての家庭菜園-



住宅に菜園をつくり、野菜づくりで発生する温度を室内に取り入れる。菜園内は棚畑とし、高さの変化で生じる温度差から野菜の種類や生育段階を分ける。3世帯がそれぞれ野菜づくりを教え、教わり、一緒に育てて、食べる。さらに地域住民にお裾分けするなど、さまざまなつながりが生まれる。

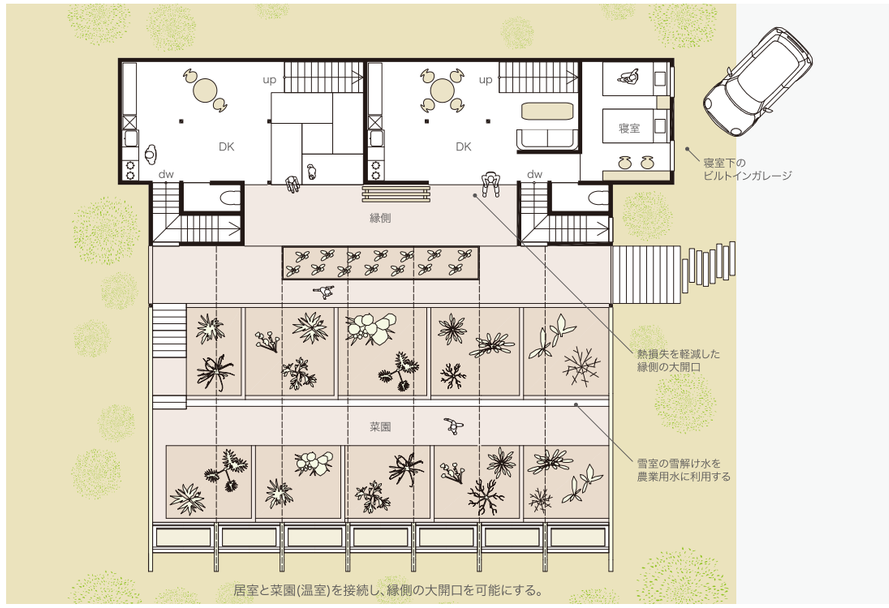


親と子と孫が一緒になって、野菜づくりを楽しむ

吹き抜けのある居室から縁側を通して菜園へと一体的につながる

収穫した野菜を地域住民にお裾分けする

平面図



居室と菜園(温室)を接続し、縁側の大開口を可能にする。

設計コンセプト

高い断熱性能や空調などによって決して不快ではない現在の暮らし。その一方で、何気なく窓を開けた時のふとした快適さが心地良いとも感じられる。住民の生活行為によって暮らしが育まれる住まいは、今後さらに技術が発展する未来においてより重要になる。そこで、住民の暮らしを自給的に支える家庭菜園に着目し、コロナだけでない未曾有の事態に備えた住まいを提案する。
菜園では、さまざまな野菜を育てるために、さまざまな環境が必要とされる。そのため、菜園は地形に合わせて棚畑とし、野菜全体に日射が当たり、種類に応じた温度差を生み出す。さらに、季節や時間に応じて屋根に簾をかける、水やりを行う、窓を開けるなど、住民の手が加わってより繊細な菜園環境を整えることができる。
こうして菜園で育まれた環境は、必要に応じて住環境にも積極的に取り入れられる。冬場には菜園に面した住居の窓を開け放ち、棚畑を上昇してきた空気が室内を暖めると同時に、乾燥した空気を加湿する役割も果たす。夏場には、水やりの打ち水効果と簾の日陰によって冷やされた空気が、気流に乗って住居を吹き抜けていく。
他にも冬場に雪かきをした排雪の利用、軟石による輻射熱取得、野菜の蒸散作用など、菜園での野菜作りと住居での暮らしが相互に関わる住まいを計画し、より豊かな環境を持った暮らしができる。

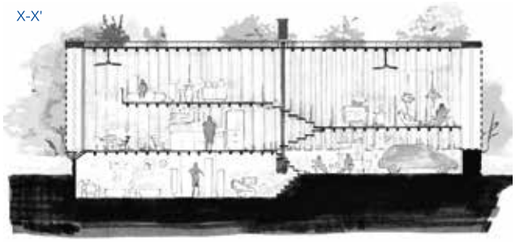
審査委員講評

地域の特性を活かした温熱環境を取り込んだ、持続可能な住まいの提案です。夏と冬の過ごし方や、菜園の高さに応じた生育環境など温熱の分析から建築の形態へと展開させている点を評価したい。また、家庭菜園を通して近隣住民との関わりへも言及している点が素晴らしいが、菜園内部に人が滞留できるような居場所が設計できているとより可能性が広がる作品です。

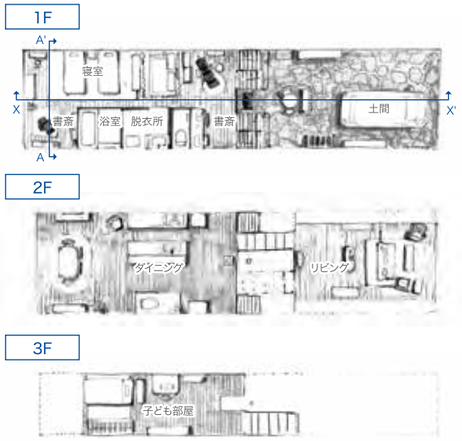
学生部門 佳作

岡山県立大学
高田 ひみ子

【作品名】
雪下ろしの家
「抜け」から生まれる空間



平面図



立面図

イメージ図

断面図

1.立地場所

富山県富山市立山町。南東には立山連峰、北西には富山湾が臨める自然豊かな場所。同時に豪雪地帯でもある。町域の過半は川を挟んで富山市と向かい合っており、富山市へ出勤する者も多い。喧噪から離れて伸び伸びと生活することができる地域である。

2.設計コンセプト

雪下ろし・雪かきをしなくていい家

住宅間が狭く、屋根から落ちてきた雪が積もって高い雪壁ができる。
➡日光が入らない
➡雪が溶けにくい

敷地に対し細長くすることで住宅間の幅を広くする。
➡日光が入る
➡雪が溶けやすい
➡周辺の見通しが良くなる

3.空間構成

① 採光
天井の先端部分をガラスにすることで部屋全体に均等な光を入れる。

②熱環境
中央とダイニングに吹き抜け空間を配置し、薪ストーブの暖気が部屋全体に行き届く。寝室は安定した半地下空間に設けた。開口部に通風窓を設け、夏は風が家全体に行き届く。

③ステップ空間
部屋と部屋との仕切りに壁ではなく空間のズレを利用。家族同士がつながり、外の景色においても前後がつながる開放的な空間となっている。

設計コンセプト

この家は普段は「雪かきをしなくていい家」であり、緊急時には「突然の大雪に強い家」でもある。近年日本列島では台風、洪水など異常気象が多発している。私の地元である富山でも今年大寒波による大雪の被害に見舞われた。近年の積雪量が減少傾向であった為に突然の大雪に交通渋滞・物流が途切れるなど生活の面において被害が甚大であった。
そこで今回のテーマを今後起こり得る異常気象に対し適応できる家と捉え、経験した大雪の被害を踏まえて「雪は積もるが豪雪地帯ほど雪に対する設備が整ってはいない」そんな地域に適応した家を提案する。
雪問題で目を引いたのは除雪された雪である。屋根から落ちた雪や道路から除雪された雪が住宅間や道路に積もるため日差しが入らず溶けきるまでに時間がかかる。そこで敷地面積に対して細長く建てることで屋根雪が落ちる面積を広くし日光に当たりやすくした。間取りは部屋と部屋を仕切る壁を無くし、ステップフロアにすることで個別でありながらもつながった空間になることで空気の温度が一定となり夏は風通りがよく、冬は薪ストーブの暖気が回るものになっている。玄関と土間が一体となっており、広い土間を開放して地域の人との交流スペースになることを想定している。集合住宅として扱えば隣接する住宅間が広くなり、空や立山連峰の景観と調和が映えるものとなっている。

審査委員講評

豪雪地帯を敷地に設定した計画です。半地下を含むスキップフロアの3層空間は平面的に広がるのではなく縦方向へと伸びていきます。光の取り入れ方や熱環境に対しての仕掛けも巧みで、雪を含めた自然環境に対峙するのではなく共存していく事を想像させる建築です。この建築が連なっていくことで新たな景観が生まれる事を予感させてくれます。

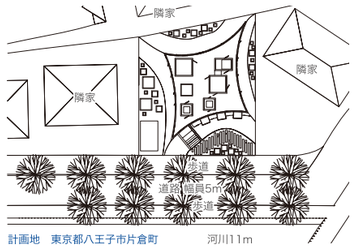
学生部門 審査委員特別賞

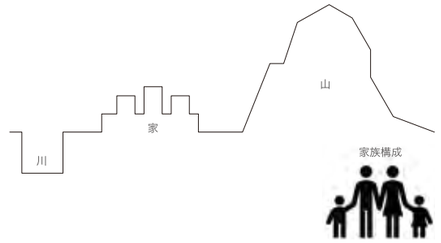
日本工学院八王子専門学校
大貫 龍紀

【作品名】
帆船の家

テーマ
環境問題と気候風土の問題を解きながら、人々の暮らしに寄り添い内にも外にも開くカタチを模索

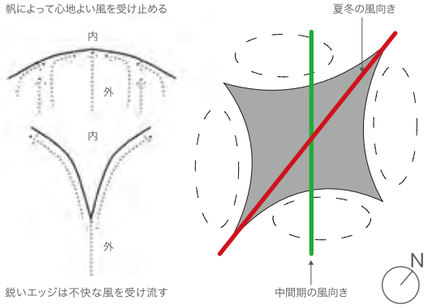
コンセプト
気候風土と温熱環境を「帆」の特性で解き、快適で情動に寄与する住宅を提案





1.帆の話

快適な住環境には、空気の流れが重要なカギを握る。風は暮らしにおいて重要な役割を果たすが、夏や冬の寒暖差の激しいこの土地では、外気による熱損失をなるべく抑えることが大切である。
帆の形状を利用し、風を受け止め取り込む面と、風を受け流すニュートラルな面を作るという設計手法をとった。南北の鋭いエッジは夏と冬の風をかき分け、緩やかにたわんだ箇所は中間期の心地良い風を内部へと取り込む。



2.平面計画の話

住宅内で空気を循環させ、風の動きと人の回遊動線を生みだす。各部屋-LDK間で分散・集結するように計画。細かいボックスによって周辺環境に対してのボリュームを落としている。

3.断面計画の話

八王子市は小規模ながらも盆地状の地形であるため、内陸性で寒暖差が激しい。安定した環境を生むために居住部分を半地下へ沈める設計手法(敷地はハザードマップ対象外)を取り、帆の架構によって半地下を有効に利用する。

開口部を大きく設けると夏と冬の熱損失が大きくなるため、煙突効果やベンチュリー効果、ソーラーチムニーなどによって効果的に換気を行うことが望ましい。

1階はGL-800㎜まで下げる。これはヒューマンスケールに則った高さであり、GLから遠いと半地下である必要が無くなり、GLが目線と同レベルであれば地面の圧迫感によって心地良いものではなくなる。GL-800㎜というのは椅子に座った際に胸下くらいにGLがあり、キッチンとほぼ同じ高さである。庭と適度な距離感で、自然と生活が対等な関係性を持つ暮らしが生まれる。

設計コンセプト

未来に向かっての住宅の在り方の一つとして、バイオクライマティックデザインという設計手法が挙げられる。これは地域の気候風土などの特性を利用して、人間にとって快適な住環境を作るというデザイン手法である。それは数字としての建築ではなく、暮らしの中で人々に様々な情動を与える形態である必要もある。
私の考えるバイオクライマティックな新しい住宅とは、暮らしにおける根本的な環境問題と、気候風土から導き出された問題を解きながら、先駆的・積極的に内にも外にも開くカタチを模索することである。
建築とは地に建つものであり、三次元的で、人々の暮らしの表れである。
今回提案した住宅は大地と大気を明確に隔てるのではなく、暮らしの中で、その両者を肌に感じる距離感から生まれるデザインと情動を模索した。
川が流れ、山々の稜線が美しい緑豊かな八王子の地には、その景観を紡ぐ様な建築が相応しいのではないだろうか。ここでは大気の動きから導かれた流線的な「帆」のカタチ、暮らしの中で大地との適度な距離感を生む「半地下」、空気を共有することで生まれる「循環と温熱環境」。いわば地に建つ帆船の様に風を制御し、大地に少し沈み、大気という"大きな海"をたゆたいながら過ごす住宅である。
"地の象徴"としての八王子に"地に根ざした帆船"として、人々の暮らしと環境を支え、大きな自然の中を航海する新しい住宅の提案をする。

審査委員講評

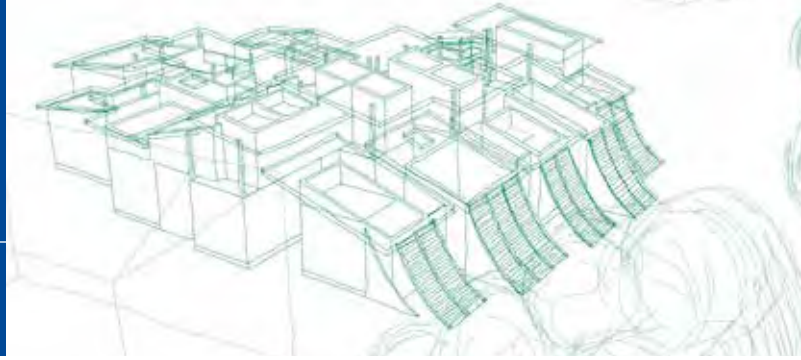
通風と採光。この言葉ほど、いつの時代も日本人が家に求めてきたものを言い得ているものはないと思います。この作品にも、自然のエネルギーだけで四季折々快適に暮らすことを実現しようとする気迫が感じられます。「帆の話」に始まり「航海の話」で締める展開も楽しく、随所にちりばめられた専門性の高いワードの意味もすっと腑に落ちました。

学生部門

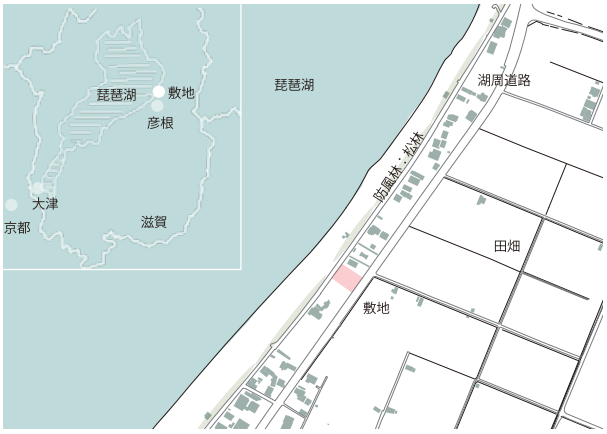
審査委員特別賞

滋賀県立大学
櫻井 陸人

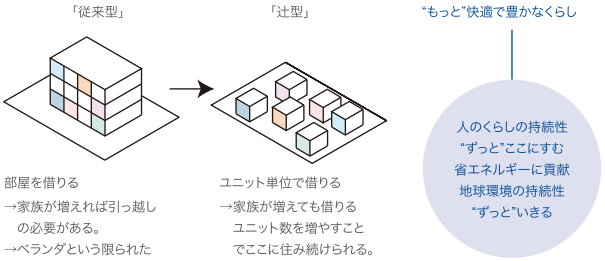
【作品名】
びわ湖畔に集まり棲まう家



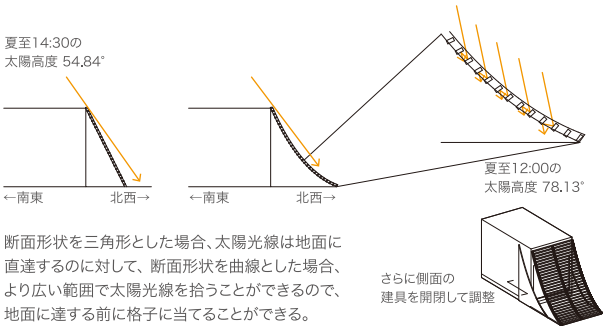
配置図



1.サスティナブルな集合住宅

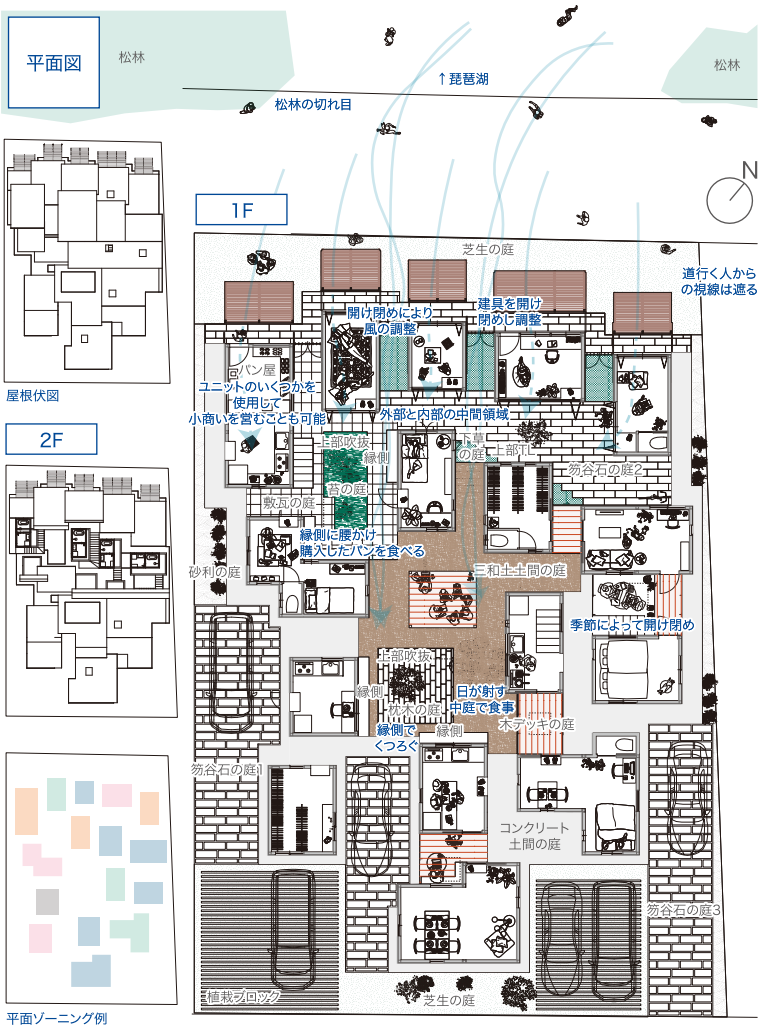


2.格子により風と光を砕く



断面形状を三角形とした場合、太陽光線は地面に直達するのに対して、断面形状を曲線とした場合、より広い範囲で太陽光線を拾うことができるので、地面に達する前に格子に当てることができる。

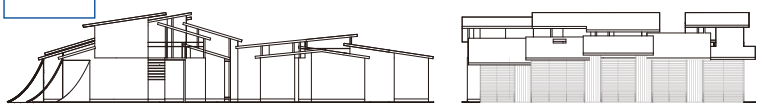
平面図



単身1・・・・・41.41㎡
単身2・・・・・38.92㎡
2人組み・・・40.79㎡
4人組み・・・74.60㎡

周辺の「辻」という細い通路が住宅間を通り抜ける街路の構成を取り入れた分節配置により、ユニットをいくつ使うかは住まい手が自由に決められる計画とする。ライフスタイルや家族構成の変化によって住空間の縮小と拡張が可能で、住まい手の転入出にも柔軟に対応し世代を越えて受け継がれてゆく住まいを実現する。

立面図



コロナ禍における住空間の再考により半屋外空間や中間領域の価値が見直され、その需要は高い。温暖化による影響で、夏場の冷房のエネルギー消費量は冬場の暖房のエネルギー消費量と同等となるという予測も立てられている。このような状況で冷房を用いずに過ごす半屋外空間を設けることの意義と重要度は今後高まると言える。本提案では多様な半屋外空間を多く設けることを、「辻」という街路の構成を住空間に応用することで実現する。

設計コンセプト

日本一大きな淡水湖―琵琶湖。その風景や生態系は素晴らしいものである。そして、琵琶湖畔に住む人々のかつての生活はこの美しく大らかな湖に寄り添って営まれていた。しかし昭和以降、琵琶湖沿岸には湖周道路やフェンス・湖岸堤防・防風林等が整備され、人々の生活は琵琶湖と分断され大きな変化を遂げてしまった。
そのため、物理的には水面が近くてもすぐに降りていけたり景色を眺められたりすることができる敷地は非常に少ない。それに対し、本敷地は防風林の切れ目に位置し景色も良くすぐに水面に降りていける。しかし、そのために琵琶湖からの北北西の風が容赦なく吹き付ける敷地でもある。
今回の計画では、「琵琶湖」という強烈な環境要素に近接する敷地において、通常は防風林により防がれる風を建築のデザインにより制御し取り込むこと、また、ライフスタイルや家族構成の変化によって住空間の縮小と拡張が可能な住まい手の転入出に柔軟に対応する構成とすることで、この地に根差し世代を越えて受け継がれていく集合住宅のあり方を提案する。

審査委員講評

分棟配置された集合住宅を更に細分化しつつ地域の要素から配置を導き、さらにCFD解析による通風と採光をデザインによってコントロールすることで魅力的な提案に昇華させている点が素晴らしい。一方、格子面以外のファサードデザインや内部空間と連動した屋根形態を踏まえた建築の全貌が理解できる表現があれば更に良かったように思います。